

城里町の文化財さんぽ(二四)

町指定文化財(工芸品)

「刀」 剣

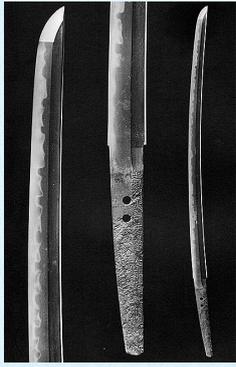
〔常州水戸住坂東太郎鎧正入道下伝〕

指定年月日／昭和四九年四月二〇日
所在地／城里町粟 管理・所有者／個人

この刀剣は、江戸時代前期の水戸の刀工坂東太郎鎧正入道下伝が鍛えたものです。

長さ五四・二センチメートル、反り一・三センチメートルで、種別は脇差です。程よい身幅の

刀身は精良に鍛えられ、力強く華やかな互の目丁子の刃文が焼かれています。中心(柄に入る部分)には右下がりの鑓目が施され、二個の目釘穴が穿たれています。中心の表(刀を差した時外側を向く面)に「常州水戸住坂東太郎鎧正入道下伝」の銘文があります。



坂東太郎鎧正入道下伝の名称

は、藩主徳川光圀が刀工武蔵守吉門に対して延宝四(一六七四)年に下賜したものです。

「坂東太郎」は関東で一番ということ。「鎧」は中国の伝説の名剣鑊耶、「正」は日本の名刀正宗から執つて名工であることを暗示し、「入道」は仏門に入っている者であること、「下伝」は大村加下(鍛刀家・光圀の侍医または御伽衆の弟子であることを示しています。

坂東太郎鎧正入道下伝(武蔵守吉門)は、俗称を川村長兵衛といひ、水戸藩の御抱鍛冶として水戸台町に住しました。

余談ですが、江戸時代後期の儒学者小宮山楓軒は、随筆集『楓軒偶記』に「ト伝は塩子村の人で、子孫は下坪村に住した。下坪には光圀から賜つた掛札がある」と記しています。真偽については今後の研究に待つ部分もありますが、城里町民にとつては夢のある話です。

解説文／町文化財保護審議会会長 小山映一
問合せ 教育委員会事務局
☎029-1288-3135

俳句

冬の星またたくやうに家はある
飯田 勇一
惜春や鯛せんべいの反りたしか
鯉淵 寿美恵
野良着干し日はからからと春埃
綿引 英子
辛夷満開歎の土落としけり
森 静江
ひと筋の春陽差しをりけもの道
仲田・まちゑ
柔らかな子の手今だけ初桜
中野 千賀子

文芸しろさと

短歌

鶏の五羽がハクビシンに噛まれる
てかたき打ちたく思ふくやしき
杉山 みちこ
枯色に広がる刈田も吾が裡も
春待つものなのなべて静けし
渡辺 千紗子
いくばくの余命と思ふ老い義姉
にも春は巡りていのち勢ふ
大森 久子
亡き母へ感謝を込めて茶を供
う母を偲ぶる我も老へたり
青柳 京子
週末は娘夫婦が訪いくれて
老いの生活を見守りくるる
所 美恵子

川柳

亡き夫のバンドラの箱鳥雲に
今瀬 多代美
岩を打つ波音はねて雪解川
飯村 昭子
海を向く横顔ばかり仏の座
竹内 幸子
花祭ぬれては光りお釈迦さま
瀬谷 博子
満開の桜に念ず坂の上
岩下 金司
春泥を固めて深き轍かな
田口 勝元
ジョギングのかかるとに易し春の土
寺門 孝子
茨城から横綱誕生稀勢の里
日本人の夢叶ひてくれぬ
山形 式妙
出産に立ち会いしこと話す
女孫は生命の尊き痛感せりと
枝 不美
息子に誘われ来し宿の松が
枝に見ゆる海原は絵画の如し
島 愛子
病院へ月に一度の診察を手
押し車に支えられ行く
坪井 きよ子
高齢者講習終了証明書添えて
更新氣を引き締めて
萩谷 登喜子
春来たる去年に一緒に見し桜花
を逝きにし人に寄り添いて見む
富田 佐智子
「キビキビ」と動き奏でる若人の
マーチングバンド心洗わる
菌部 光子
窓開き椅子に寄りそえ空眺
め人影見えず静かなる里
富田 欽子
八十歳七十歳が若く見え
富田 多蔵
久しぶり名前と顔が一致せず
車田 綾子
大相撲石浦・宇良でおもてなし
飯村 孝一
ひよつこと同じ訛りで里に生き
川原 清

